

## 編集後記

『世界の日本研究』第3号を、お届けいたします。今回から予告通り、英語の文章が掲載されています。毎回繰り返していますが、皆様の投稿を歓迎いたします。英語あるいは日本語でお願いいたします。日本研究に関係する情報なら、なんでも掲載します。編集の仕方についての注文がありましたら、ご意見をください。現在、『世界の日本研究』のメイリング・リストを整理中です。送付を希望される方は、お知らせください。部数に余裕があるかぎり、お送りいたします。無料です。

1. クライナー氏の「ヨーロッパ日本研究協会の設立の頃」は、同協会の20周年記念にふさわしい読み物になりましたが、それは偶然そうなったものです。今年の冬に大阪で開催されたシンポジウムの際に、クライナー氏から立ち話で「協会の設立にまつわる裏話やその背景」を聞き、後ほど手紙で本誌に原稿執筆を依頼したものです。国際交流基金の創設とそのインパクト、ヨーロッパの日本研究者の対応、コミュニケーションの道具としての英語など興味深い内容になっています。

2. アキタ氏の文章は、1989年に日文研の共同研究で発表していただいたものです。非常に論争的な性格の内容になっていますが、反論歓迎いたします。日本とアメリカの貿易摩擦に端をする知的コンフリクトは、戦後の日米関係が直面している最初の試金石であることは間違いないところですよ。

3. パンツァー先生、活字にするのが遅くなって申し訳ありませんでした。この文章は、1989年の日文研のシンポジウムの際に開催された特別研究会で発表されたものですが、内容の要約が英文になりNichibunken Newsletter No. 3に掲載され、それへの反論がウィーン大学のリンハル

ト氏よりあり、それも既にNichibunken Newsletter No. 4に載っています。この文章が、パンツァー氏が発表されたものの全文です。

4. ソ連科学アカデミー東洋学研究所の3人の文章は、1989年の秋に日文研の共同研究で発表されたものです。当時は、といってもまだ2年もたっていませんが、ベルリンの壁もありマルタ会談以前でもあり、ペレストロイカ以降のソ連の日本研究は非常に「ホット」な話だったのですが、これも活字にする時期を失したのかもしれませんが。編集担当者としては、深く反省しています。研究会には、1959年に東洋学研究所に滞在した体験のある京都大学名誉教授の井上清先生に出席していただきました。

1991年7月

園田英弘